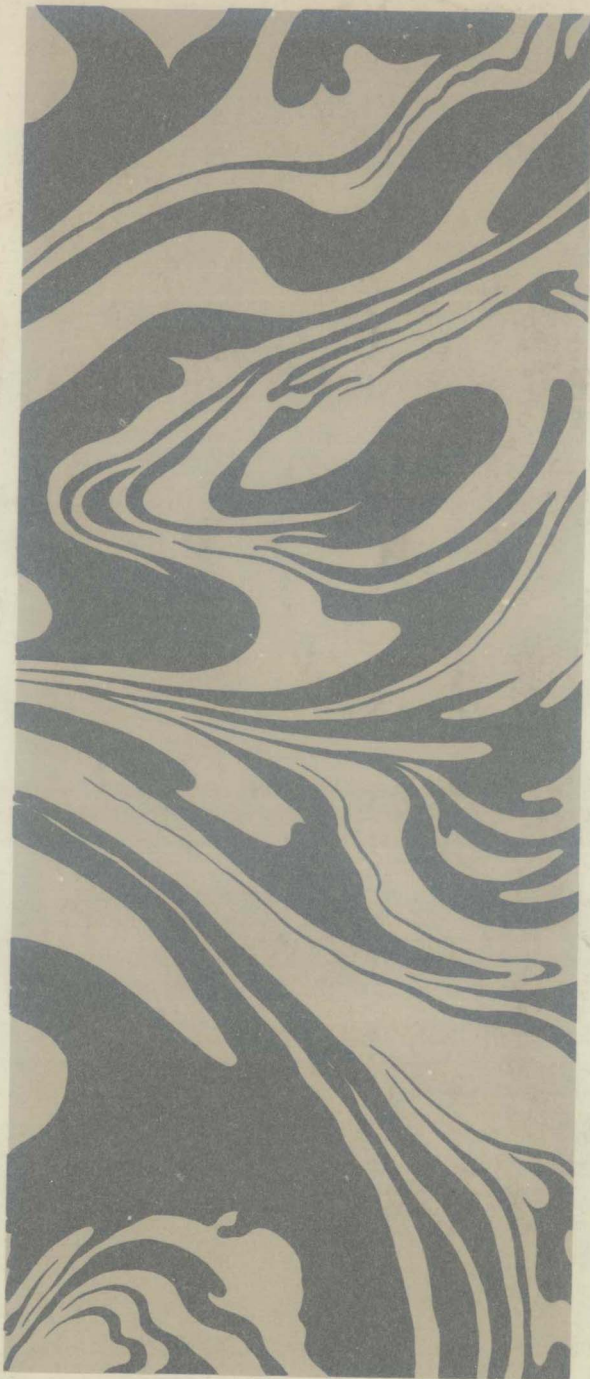


木下順二

古典を読む

18



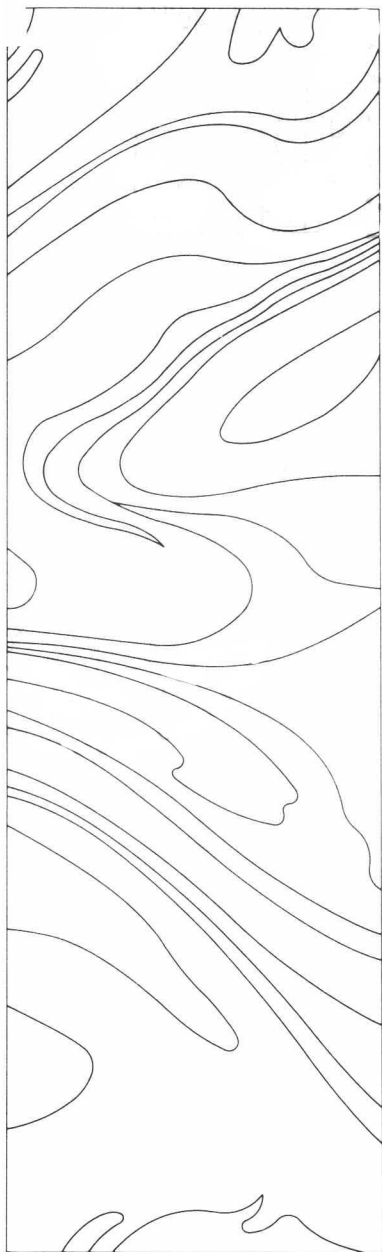
平家物語

岩波書店

家物語

木下順二

岩波書店



木下順二

1914 年東京に生まれる

劇作家

『木下順二戯曲選』(全 3 冊, 岩波文庫), 『ドラマが成り立つとき』(岩波書店), 『子午線の祀り』(河出書房新社), 『古典を訳す』(福音館書店), シェイクスピア 15 篇(講談社世界文学全集 7, 8, 9 巻)など

平家物語

1985 年 1 月 30 日 第 1 刷発行 ©

定価 1700 円

著 者 きの した じゆん じ
 木 下 順 二

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004468-0

目次

一	平家登場——「殿上闇討」……………	三
二	「祇園精舎」の意味……………	二九
三	俊寛……………	三三
1	平家全盛……………	三五
2	鹿谷の陰謀……………	三九
3	島流し……………	四八
4	有王……………	五六
四	文覚……………	六〇
1	荒行……………	六〇
2	伊豆配流……………	六四

目次

おわりに	八						
4	3	2	1	知	6	5	4
壇	屋	「知章最期」	登場まで	盛	退場以後	壇浦以後	逆櫓
浦	島						
219	215	205	200		191	182	178 169
.....							
三三				二〇〇			

平家物語

一 平家登場——「殿上闇討」

1 平家登場—「殿上闇討」

『平家物語』巻第一の冒頭の段は有名なる「祇園精舎」、これが日本古典文学大系本(岩波書店)で一ページちょうど。次の段「てんじやうのやみうち殿上闇討」は四ページ弱。まずこの四ページ弱について語りたい。これがいかにかにいわば短篇小説的におもしろいかということおよびその他についてのものもろを、有名なる「祇園精舎」より前に話しておいたほうがいいだろうと思うからである。注釈と感想をまじえながら、四ページ弱をたどって行ってみよう。テキストは原則として大系本に拠るが、まずその段はこう書き始められている。

しかるを忠盛備前守たりし時、——

「しかるを」というのは、平氏は代々、単なる地方官であつた。忠盛の父正盛の場合でいうと、初めのうちは「正盛藏人五位の家に仕へて、諸国受領の鞭をとる。」〔平家物語〕巻第四「南都謀状」——以後、本文からの引用の場合は四「南都謀状」のように記す。〕「鞭をとる」というのは、五位の家に仕えて国司の手先に使われたというほどの意味であり、つまり初めは中流貴族に仕え、結局経上^{への上}っていくつかの国守、国司、受領、呼び名はいろいろとあり格の高下もあつたらしいが、まあ県知事のようなものにまではなつた。が、そうなつてからでも、正盛がある事件の恩賞として因幡守から但馬守になつた時など、身に余る昇進だと横槍を入れる人々があつたりしたくらいである。そこで前段「祇園精舎」が「国香より正盛にいたるまで、六代は諸国の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだゆるされず（昇殿ハマダ許サレナカッタ）」と結ばれているのに対し、それを受けてこの段は、「しかるを忠盛」、この忠盛こそがその昇殿を実現させたのだと、いわばやつと願ひのかなつた平氏の思いを籠めた調子で誇らかに語り始められるのである。

さらに、昇殿（本文には「内（＝内裏）の昇殿」とある）を許されるとは、正確には清涼殿の殿上の間に入りするのを許されて「殿上人」、「雲の上人」と呼ばれるようになることだが、それは単に位が高くなるというだけのことではなく、当時の政治を動かしていた宮

廷貴族の仲間入りが認められるということであるから、この「しかるを」という語調は、もう一つ、代々の平氏が、当時の政治の中心地たる京都、そこへの進出をいかに熱烈に望んでいたかという思いも籠められた表現であると考えられるだろう。やっと、今こそ、かくて忠盛は平氏累代積年の思いを達したのであった！

ではどうやって忠盛はこの昇殿を実現したかというところ、大きな寺を京都に建て、これを時の鳥羽上皇に献上して、上皇「御感ぎよかんのあまりに内の昇殿をゆるさる」というのだが、これにもいくつかの注釈がある。

忠盛が京都に建てた得長寿院——場所は左京区聖護院のあたりだったが今は無い——というのは三十三間堂、というのとは三十四本の柱があつて、柱と柱の間が三十三あつて、その一つの間が三メートルあつて、だから長さが百メートルを超えようという大きな本堂の中には、両側に五百体の仏像、真中に本尊の観音像、合わせて一千一体の仏像が並ぶというすばらしく大きな寺を作り、忠盛はこれをそっくり「御願ごがん(寺)」として、つまり鳥羽院の発願によって建てた寺だとして、鳥羽院に進呈してしまったのである。それが一一三二年天承二年(本文では天承元年となっているが)のことであつた。時に忠盛歳とし三十六。鳥羽上皇はその「勸賞けんじやう(褒美)」にどこか「闕国」(国守の席のあいている国)はないかと見渡して

みたらちようど但馬国があつたのでこれを忠盛に与え、さらに感激のあまり昇殿をまで許したというわけだ。

ところで三十六歳の忠盛がなぜそんな立派な寺を建てることができたかというと、忠盛自身がそうであつたとは別に本文に書いてないが、当時の地方官が、中央とつながる官僚という地位を利用して、任期中にうんと財をためこんだという話は少なくない。

中に有名なのが、『今昔物語』巻第二十八にあるもので、信濃守であつた男が任を終えて京に帰るとき「多^{オホク}ノ馬共ニ荷^カヲ懸^ケ」て懸橋^{かけはし}を渡ろうとしたら、その国守だつた男が馬ごと深い谷底へ落ちてしまった。大騒ぎをしていると底のほうで声がするので籠を綱で下ろして引き上げてみれば、本人ではなくて平茸が一杯はいつている。また谷底から声がするのでまた籠を下ろすと、落語の『愛宕山^{あたごさん}』とは反対に、本人が平茸を「三総^{ミツゾウ}」も持つて上つて来た。聞いてみるに、自分は落ちる途中大きな木に引つかかった。するとその木に平茸が一杯生えているので身の危険も忘れてできるだけ採つたが、まだあとにたくさん残っているのが大変損をしたような気がする、家来たちが心配してくれたことなどそつちのけで残念がつている。一同失笑したら彼は皆をたしなめて、「受領ハ倒ル^{タラル}所ニ土ヲ(モ)ツカメ」というではないかといったのは、「当時の国守の強欲無道の象徴として古来有名

で、後の節用集の類にも引かれている」と大系本の頭注にあり、本文のほうは、こんな時でさえこれだけ強欲非道なのだから、この分では任期中、取れるものはさぞ剩すところなく取り立てたことだろう、となっている。

ただし前にもいったように、忠盛がそういうふうであったと書いてあるわけではないが、代々各地の国主であった平氏が、相当の財力を持っていただろうことは、これで十二分に想像できる。

が、忠盛が昇殿できたのは、単に財力によっただけではなかったろう。彼は武士として若い時から武勇の名が高かった。十七歳で盜賊を捕え、二十七歳では延暦寺の僧兵の騒ぎを鎮め、三十三歳の時には、瀬戸内海を横行する海賊を平らげる役を仰せつかったりした。しかも、これは京都に進出した後の話だが、なよなよとした都びとに武士の実力を見せつけるべく、瀬戸内海の家賊どもを引っ捕え、荒くれ男七十人を縛りあげて京中を引き回して見せたが、その中には多くのサクラを混えていたと、公卿の日記に書かれたりしている。つまり、結構知恵もあったわけだ。

だから、この年宮中に出入りを許されるようになったのも、ただ寺を献上したからそうになったというのではなかったはずだ。忠盛を頭とする平家一門の実力が、経済的にも武力

の上でも、上皇がそれを認めぬわけには行かないまでに大きくなっていた、ただ昇殿のきつかけとして、「御願得長寿院」の献上があつたということなのだろう。

以上、このようなことをのみこんでおけば、「殿上闇討」の最初、大系本でいうと書き起しの四行ほどのところは理解できるはずだ。すなわち――

しかるを忠盛備前守たりし時、鳥羽院の御願得長寿院を造進して、三十三間の御堂をたて、一千一鉢の御仏をすへ奉る。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には闕国けつこくを給ふべき由仰下さる。境節おりふし但馬国のあきたりけるを給たひにけり。上皇御感のあまりに内の昇殿をゆるさる。忠盛三十六にて始て昇殿す。

続いて――

雲の上人は是を猜そねみ、同き年おなじの十二月廿三日、五節ごせつ豊明よのあかりの節会せちあひの夜、忠盛を闇打にせむとぞ擬せられける。

以上が、以下に述べる短篇小説的事件の前提で、大系本の本文もここで初めて行がかわるのだが、右の部分にもちょっと注釈を加えておこう。

宮廷貴族たちが「是を猜み」というのは、いうまでもないことだが、それまで宮中において総てのことをとり行ない政治を動かしていた連中にとって、忠盛という武人、しかも地方の役人であつた者が新しく自分たちの間に割り込んでくるなどということは、考えてもみなかったこと、到底我慢のならないことなのであつた。ところが鳥羽上皇の考えは——これはことに「院政期」と呼ばれる白河、鳥羽、後白河、それにもう一つ加えれば後鳥羽の約百年間の上皇たちに共通の考えだつたようだが——政治上自分の立場を強めるためになら何でも、つまりこの際は新しく進出して来た武士というものの実力を、そして後白河となると平家だろうと源氏だろうとまたそれ以外の力だろうと *divide and rule* ——分割して統治するのに役立つものへは誰にでも院宣を濫発するという形になるが、とにかく自分に有利な力はどうどん利用しようという上皇の立場がある。

だから貴族たちは、何とかしてまず最初に忠盛にひどい恥をかかせて、以後大きな顔がでないようにしておかねばならんと「擬せられける。」つまり計画した。それには例年の「五節」と呼ばれる儀式を利用するのがいい。というのは、新嘗祭を中にはさんで前後

四日間ひらかれるこの儀式の最後の四日目、「豊明とよのあかりの節会」は上下打ちまじつての無礼講の大宴会である。その騒ぎの中で何とか忠盛を闇討（闇打とも本文は書いているが）にするのが一番いい。——というこの「闇討」という語に新潮社版の『平家物語』で水原一氏が、「闇闇で袋叩きなどにすること。殺害ではない。」とわざわざ注をつけていられるのは適切である。闇討といえば普通殺すことだが、この際忠盛を殺してしまつては、逆に大きな問題となつて、貴族たちが却つて困る結果にもなりかねないわけなのだから。

以下、本文の必要な個所を引用しながら、話の順序を追つてみよう。まず——

忠盛是を伝聞つたへききて、——

ところが忠盛は闇討のことを伝え聞いて、というのだが、これはたまたま伝え聞いたのだとは思えない。あの知恵のある忠盛のことだ、彼なりの情報網が張つてあつて、そこに貴族の計画が引つかかったのだと私は考える。

けれども、「伝聞て」計画を知つただけでも、忠盛は、平気な顔をしてその夜宮中よ

へは行って行った。

ただ、ある用意をして行った。

兼て用意をいたす。

というのである。

鞘巻さやまきと呼ばれる大形の短刀を、礼装の腰にわざとむぞうさに、ということとは、よく見えるように差して、忠盛は宮中へは行って行った。

参内のはじめより、大なる鞘巻おほきを用意して、束帶の下にしどけなげにさし、火のほのぐらき方かたにむかつて、やはり此刀をぬき出しいだ、鬚ひげにひきあてられけるが氷ななどの様にぞみえける。諸人目をすましけり。

清涼殿から紫宸殿へ渡る暗い廊下に、燈火ともしびがいくつかほの暗くゆらめいている。その燈火の一つのそばにつと寄って立ち止ると、忠盛はゆっくりと鞘巻を抜いた。